

# 悠久の河

25

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

### 苦悩

半年が過ぎ、一年が過ぎた。

先の見えてこない岩山の切り抜き工事に彌兵衛は、疲労の色を見せ始めていた。

「もう、後戻りすることは出来ない。——遣り遂げるか…、それとも、岩に頭を打ちつけて死を選ぶか…。」

彌兵衛は疲れた頭で、ぼんやりと、そんなことを考えていた。

「お父さまは、立派な方よ。きっと、この仕事を遣り遂げて下さるわ」

ふいに、彌兵衛は、娘のゆうの声を聞いたように感じた。彌兵衛は慌てて鑿を工具箱に仕舞い、槌を袋に入れると、正林寺を目指して、歩き出した。

彌兵衛は仕事着のまま、正林寺の本堂に上がり込み、正面から観世音菩薩を凝視した。

「娘、ゆうの姿に身を変えて、私をここへお導き下さったのは、菩薩さま、あなたさまでござろうか」

彌兵衛は身を正して菩薩に問いかけた。

「ここへお導き下されたのは、私に岩削りをまだ続けよと仰せられるか…。」

目の前の観世音菩薩は、やさしく微笑むだけで、何も答えなかった。

彌兵衛は、なおも問い続けた。



画 寺戸良信

「お答え下され、側にいる妻や子供たちまでも巻き込んで、私の夢を追っかけようとするこの彌兵衛に、このまま先の見えぬ夢をまだ追っかけよと申されるのか」

彌兵衛の口調は、だんだん激しくなった。

「お答え下され！ 答えて下され！」

「彌兵衛どの、疲れておいでなのではないかのお」

彌兵衛の背後から、静かに声をかけたのは正林寺の住職であった。

「まあ薬草茶でも飲んで、咽を潤して、気を落ち着かせなざるが良い」

ふと、我に返った彌兵衛の頬には涙のあとが有った。

「恥ずかしい姿をお見せ致した」

「なんの、なんの」

住職は動じなかった。

「何事をするにも、自分の心に迷いの一つや二つ生じぬようなお人では、人の上に立ち、人の幸せを考えることは出来ませぬ。また、迷い過ぎる人も、人の上に立つことには向きませぬい」

住職は、そう言うと、本堂の障子を開け、外を眺めた。

「もう、じきに、厳しい冬がやって参りますなあ。一年、一日たりとも同じ日は有りませぬ。

人間、一生を生き抜くというのも大事業で有りますなあ」

住職は、ゆっくりと言った。

「はあ…」

彌兵衛は住職の勧めてくれた薬草茶を口に含んだ。一服のお茶が、これ程までに身体と心に染み入ったことは無かった。